

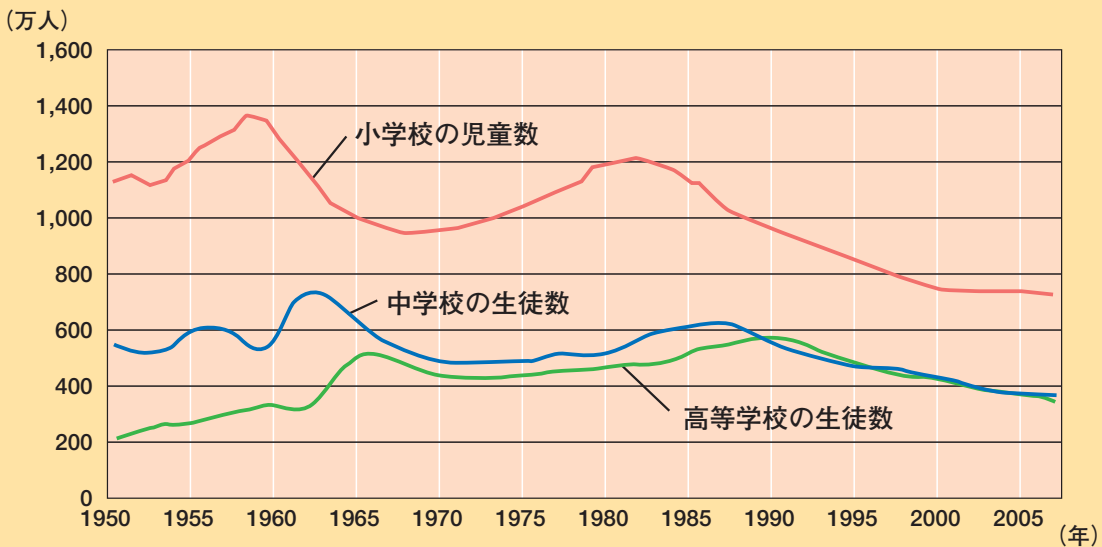
身近な地域からみた少子化の影響 ～児童・生徒数、学校数の減少～

少子化の影響は、地域の学校の児童・生徒の人数等の推移に現れている。

まず、小学校の児童数の推移をみると、第2次ベビーブーム世代の1981（昭和56）年度の1,192万4,653人以降、年々減少し、2007（平成19）年度には、1950年代後半のピーク時の約半分である713万2,874人にまで減少している。中学校や高等学校

の生徒数の推移についてもほぼ同様の傾向であり、中学校は1986（昭和61）年度に610万5,749人であったものが2007年度には361万4,552人に、高等学校は1989（平成元年）年度に564万4,376人であったものが、2007年度には340万6,561人にまで、それぞれ減少している。

第1-1-17図 児童・生徒数の推移（小・中・高校）



資料：文部科学省「学校基本調査」

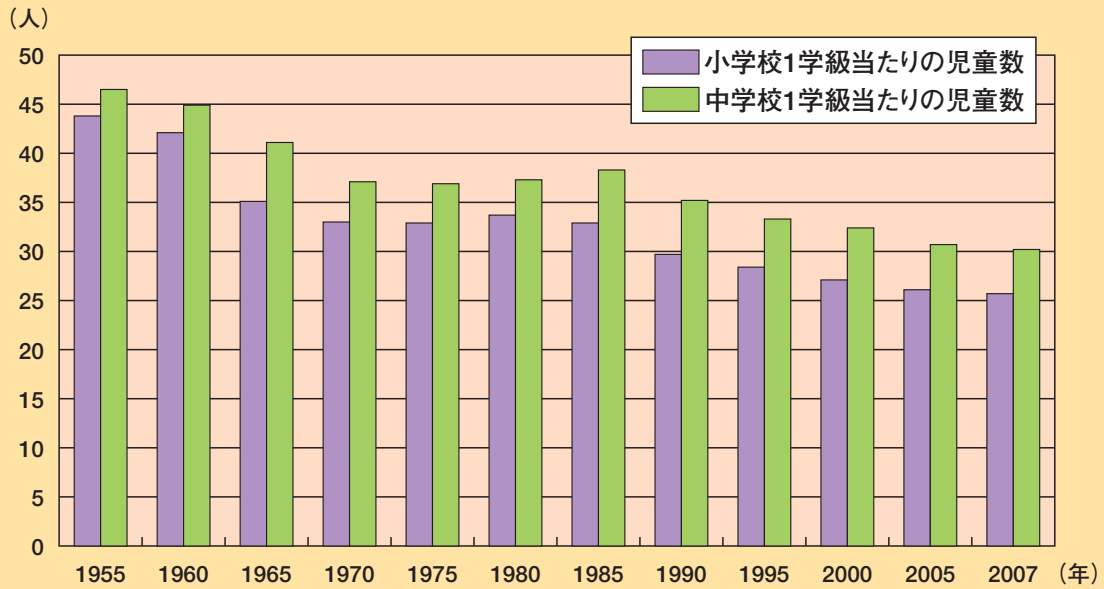
1学級当たりの児童・生徒数でみると、小学校では1955（昭和30）年度の43.8人から2007年度の25.7人と、約18人の減少となっている。同様に、同じ時期の中学校の生徒数の推移をみると、中学校では46.5人から30.2人と、約16人の減少となっている。

学校数について、およそ50年前と比較すると、小学校では、1957（昭和32）年度の2万6,988校から2007年度の2万

2,693校へ、中学校では、1957年度の1万3,622校から2007年度の1万955校へと減少している。高等学校では、1957年度の4,577校から1988（昭和63）年度の5,512校まで上昇傾向であったが、それ以降減少傾向となり、2007年度には5,313校となっている。

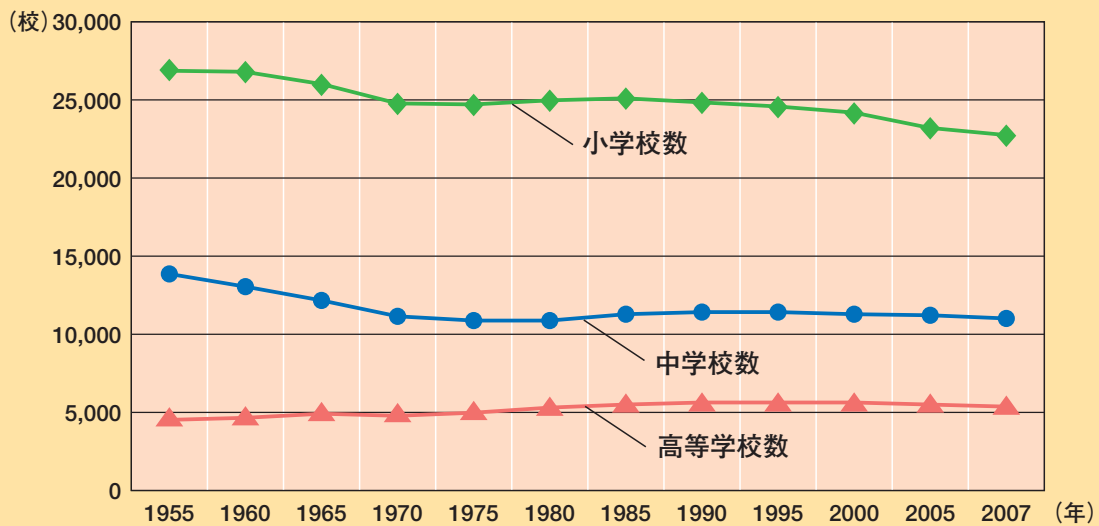
この背景には、児童・生徒数の減少による教育機関の統合がある。小・中学校の統合によって、遠距離通学を余儀なくされる

第1-1-18図 1学級当たりの児童・生徒数の推移



資料：文部科学省「学校基本調査」を基に、内閣府少子化対策推進室において作成

第1-1-19図 学校数の推移



ケースなど児童・生徒への負担が大きくなることも考えられる。

こうした子どもの数の減少は、子ども同士が切磋琢磨し社会性を育みながら成長していくという機会を減少させ、自立したたくましい若者へと育てていくことをより困難にする

可能性があるとの指摘もある。

このほか、子どもの集まる祭りやイベントが姿を消したり、町内会で夏祭りをやっても高齢者の姿の多さが目立つようになるなど、少子化の影響は、地域における日常生活の中で、目に見える形で現れてきている。